

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平5-132600

(43)公開日 平成5年(1993)5月28日

(51)Int.Cl. ⁵	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
C 0 8 L 27/06	L F B	9166-4 J		
51/00	L K S	7142-4 J		
// (C 0 8 L 27/06				
51:00)				

審査請求 未請求 請求項の数4(全 11 頁)

(21)出願番号 特願平3-294222

(22)出願日 平成3年(1991)11月11日

(71)出願人 000000941

鐘淵化学工業株式会社

大阪府大阪市北区中之島3丁目2番4号

(72)発明者 松葉 邦美

兵庫県加古川市平岡町山之上684-33

(72)発明者 長谷川 俊彦

兵庫県加古郡播磨町北本荘6丁目3番23号

(72)発明者 細井 英機

神奈川県川崎市麻生区百合丘1-12-1

(74)代理人 弁理士 朝日奈 宗太 (外1名)

(54)【発明の名称】 耐候性、耐衝撃性、2次加工性を改良した塩化ビニル系樹脂組成物

(57)【要約】

【目的】 高度に耐候性、耐衝撃性および2次加工性に優れ、成形加工して得られた成形品を圧空成形または真空成形する際に均一にかつ高延伸しうる塩化ビニル系樹脂組成物をうること。

【構成】 特定のアクリル系架橋ゴム重合体の存在下に、メチルメタアクリレートを主体とする単量体成分を重合させてえられるグラフト共重合体であって、該共重合体100重量部中の架橋ゴム重合体部数(A)が $\eta_{sp}/C > (A)/80$ (Cは100ccのアセトンに溶解させた、グラフト共重合体のメチルエチルケトン抽出成分のg数)であり、かつ $\{(\text{グラフト共重合体中のメチルエチルケトン不溶分の比率}(\%)) / (\text{グラフト共重合体中の架橋ゴム重合体の比率}(\%)) - 1\} > 0.1$ であるグラフト共重合体と塩化ビニル系樹脂とを配合した組成物。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 アルキル基の炭素数が2～8であるアルキルアクリレート79.9～99.9重量%、多官能性単量体0.1～5重量%およびこれらと共重合可能な他の単量体0～20重量%からなる架橋ゴム重合体40～75重量部の存在下に、メチルメタクリレート50～100重量%、アルキル基の炭素数が2～4であるアルキルメタクリレート0～50重量%およびこれらと共重合可能なその他の単量体0～30重量%からなる単量体成分60～25重量部（上記架橋ゴム重合体と上記単量体成分の総量は100重量部）の全部を重合して得られるグラフト共重合体(a)又は上記架橋ゴム重合体の存在下に上記単量体成分の一部を重合して得られるグラフト共重合体(b)と上記単量体成分の残部を別途重合して得られる重合体との混合物(c)であるグラフト共重合体(d)（グラフト共重合体(a)又は混合物(c)のいずれかである）からメチルエチルケトンで抽出される成分の0.2g/100ccアセトン溶液を30℃で測定して求めた η_{sp} と、該グラフト共重合体(d)100重量部中の架橋ゴム重合体部数(A)とが、式(1)：

$$\eta_{sp}/C > (A) / 80 \quad (1)$$

（式中、Cは100ccのアセトンに溶解させた成分のg数、すなわち0.2を表わす）の関係を満たし、かつメチルエチルケトン抽出の不溶分として分離される成分のグラフト共重合体(d)中の比率(%)とグラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体の比率(%)とが式(2)：

$$\{ (\text{グラフト共重合体(d)中の不溶分の比率(%)}) / (\text{グラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体の比率(%)}) - 1 \} > 0.1 \quad (2)$$

の関係を満たすグラフト共重合体(d)10～30重量部と塩化ビニル系樹脂100重量部を配合したことを特徴とする耐候性、耐衝撃性、2次加工性に優れた塩化ビニル系樹脂組成物。

【請求項2】 架橋ゴム重合体のラテックスの存在下に、単量体成分の全部を加えて重合させた後、グラフト共重合体(d)を得る請求項1記載の塩化ビニル系樹脂組成物。

【請求項3】 架橋ゴム重合体のラテックスの存在下に、単量体成分の一部を加えて重合させて得られたラテックスと、架橋ゴム重合体の無い系で残りの単量体成分を乳化重合させてえられたラテックスとを、ラテックスの状態で混合してグラフト共重合体(d)を得る請求項1記載の塩化ビニル系樹脂組成物。

【請求項4】 架橋ゴム重合体のラテックスの存在下に、単量体成分の一部を加えて重合させて得られたパウダーと、架橋ゴム重合体の無い系で残りの単量体成分を重合させて得られたパウダーとをパウダー状態で混合してグラフト共重合体(d)を得る請求項1記載の塩化ビニル系樹脂組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、高度に耐候性、耐衝撃性および2次加工性に優れ、成形加工して得られた成形品を圧空成形または真空成形する際に均一にかつ高延伸しうる塩化ビニル系樹脂組成物に関する。

【0002】

【従来の技術】一般に知られているように、塩化ビニル系樹脂成形品は耐衝撃性に劣る。この耐衝撃性を改良するため多くの方法が提案されている。なかでもブタジエン系ゴム状重合体にメチルメタクリレートやスチレンあるいはアクリロニトリルをグラフト重合させたMBS樹脂が、現在広く使用されている。

【0003】しかし、MBS樹脂を塩化ビニル系樹脂と混合して用いると、耐衝撃性は改良されるが耐候性がわるく、製造された成形品を屋外で使用すると、耐衝撃性が著しく低下するという欠点がある。それゆえ、現在MBS樹脂の使用が制限されている。

【0004】この耐候性が低下する主な原因は、MBS樹脂に含まれるブタジエン単位の紫外線劣化に基づくものと考えられている。MBS樹脂の耐候性を改良し、かつ耐衝撃性を付与するため、2重結合を全く含有しないアルキルアクリレートと架橋剤とからなる架橋アルキルアクリレートゴム状重合体に、メチルメタクリレート、芳香族ビニル化合物、不飽和ニトリルをグラフト重合させる方法が提案されている（特公昭51-28117号公報）。

【0005】この方法によるグラフト共重合体を用いると、製造される成形品の耐候性は優れており、近年、窓枠など長期の耐候性を必要とする分野に本格的に使用されてきている。

【0006】この方法によるグラフト共重合体を用いると、製造される成形品の耐候性の面では満足できるものではあるが、耐衝撃性と同時に一般に2次加工性といわれている成形板を再度加熱して再加工する際の成形性、加工性を満足させるにはまだ不十分である。

【0007】なお、前記2次加工性が重要視されるようになってきているのは、次のような理由による。

【0008】たとえば、大型の看板や大型テレビ、ディスプレイのハウジングなどは、従来射出成形法により同一の物が多量に成形加工されていたが、ユーザーの好みの多様化から同じ物が多量に成形加工されることが少なくなり、むしろ少量多品種の生産が多くなってきている。

【0009】このような状況下では、射出成形法による金型代が高くつくためコストアップとなり、コストがあわなくなってきている。

【0010】このため、近年このような用途に対して、塩化ビニル系樹脂と耐候性強化剤とからなる塩化ビニル系樹脂組成物をカレンダー法または押出成形法で成形して成形板をえたのち、再度150～200℃程度に加熱して圧空成形または真空成形して目的とする成形体をうる加工方法が増えてきている。

【0011】このような成形加工方法に対して従来の技術で作られた耐候性強化剤を用いた組成物を適用したばあい、150～200℃での伸び（高温下での伸び）が不足しているため成形体のコーナーが鋭角にならない、あるいは偏肉してしまい均一な成形体がえられないなどの問題が生じる。したがって、これらの用途に対する耐候性強化剤の使用が限定されている。

【0012】すなわち、従来から開示されている技術による組成物では、前記のようにしてえられた成形板を再度加熱して再加工する際の成形性、加工性（2次加工性）が充分でなく、このような特性を満足するものに対する要望が高くなってきているためである。

【0013】

【発明が解決しようとする課題】アルキルアクリレート为主体とする架橋ゴム重合体を使用したグラフト共重合体において、該グラフト共重合体を塩化ビニル系樹脂組成物に使用したばあいに、えられる成形品の耐衝撃性を向上させるために架橋ゴム重合体の使用割合を多くすると、成形品を圧空成形などの2次加工にかけたばあいに高温時の伸びが不足し、結果としてやぶれや偏肉をおこし、いわゆる2次加工性が充分でなくなる。

【0014】本発明は、前記のごとき架橋ゴム重合体の使用割合を多くした結果として生じる2次加工性の問題を解決し、塩化ビニル系樹脂組成物の成形品に高い耐衝撃性を発現させることができるとともに、優れた耐候性を与えることを目的となされたものである。

【0015】

【課題を解決するための手段】本発明はアルキル基の炭素数が2～8であるアルキルアクリレート79.9～99.9%（重量%、以下同様）、多官能性単量体0.1～5%およびこれらと共重合可能な他の単量体0～20%からなる架橋ゴム重合体40～75部（重量部、以下同様）の存在下に、メチルメタクリレート50～100%、アルキル基の炭素数が2～4であるアルキルメタクリレート0～50%およびこれらと共重合可能なその他の単量体0～30%からなる単量体成分60～25部（上記架橋ゴム重合体と上記単量体成分の総量は100重量部）の全部を重合して得られるグラフト共重合体(a)又は上記架橋ゴム重合体の存在下に上記単量体成分の一部を重合して得られるグラフト共重合体(b)と上記単量体成分の残部を別途重合して得られる重合体との混合物(c)であるグラフト共重合体(d)（グラフト共重合体(a)又は混合物(c)のいずれかである）からメチルエチルケトンで抽出される成分の0.2g/100ccアセトン溶液を30℃で測定して求めた η_{sp} と、グラフト共重合体(d)100部中の架橋ゴム重合体部数(A)とが、式(1)：

$$\eta_{sp}/C > (A) / 80 \quad (1)$$

（式中、Cは100ccのアセトンに溶解させた成分のg数、すなわち0.2を表わす）の関係を満たし、かつメチルエチルケトン抽出の不溶分として分離される成分のグ

ラフト共重合体(d)中の比率(%)とグラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体の比率(%)とが式(2)：

$$\{ (\text{グラフト共重合体(d)中の不溶分の比率}(\%)) / (\text{グラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体の比率}(\%)) - 1 \} > 0.1 \quad (2)$$

の関係を満たすグラフト共重合体(d)10～30重量部と塩化ビニル系樹脂100重量部とを配合したことを特徴とする、耐候性、耐衝撃性、2次加工性に優れた塩化ビニル系樹脂組成物である。

10 【0016】

【実施例】本発明に用いる架橋ゴム重合体は、アルキル基の炭素数が2～8であるアルキルアクリレート79.9～99.9%、多官能性単量体0.1～5%、好ましくは0.5～5%、さらに好ましくは1～4%およびこれらと共重合可能な他の単量体0～20%を用いて、たとえば通常の乳化重合法により製造される。

【0017】前記アルキル基の炭素数が2～8のアルキルアクリレートは耐候性に優れ、かつ、耐衝撃性向上ゴム成分形成のために使用される成分であり、その具体例としては、たとえばエチルアクリレート、プロピルアクリレート、ブチルアクリレート、2-エチルヘキシルアクリレートなどが代表的なものとして例示される。これらは単独で用いてもよく併用してもよい。

【0018】前記多官能性単量体は架橋剤として使用される成分であり、その具体例としては、たとえばジビニルベンゼンなどの芳香族多官能ビニル化合物、モノエチレングリコールジメタクリレート、1,3-ブタンジオールジメタクリレートなどの多価アルコールのジメタクリル酸エステルやトリメタクリル酸エステルあるいはジアクリル酸エステルやトリアクリル酸エステル、アクリル酸アリル、メタクリル酸アリルなどの不飽和カルボン酸のアリルエステル、ジアリルフタレート、トリアリルイソシアヌレートなどのジアリル化合物やトリアリル化合物などが代表的なものとして例示される。これら多官能性架橋剤のうちでは、官能基の少なくとも1個の反応性が他の官能基の反応性と異なるものが、少量の多官能性単量体で架橋ゴム重合体をうることができるため好ましい。

【0019】前記架橋ゴム重合体の製造にあたって使用される前記アルキルアクリレートおよび多官能性単量体と共重合可能な単量体は、その具体例として、炭素数が2～8以外のアルキル基を持つアルキルアクリレート、その他のアクリル酸エステル、アクリル酸、アクリル酸の金属塩、アクリルアミド、アルキルメタクリレート、メタクリル酸、メタクリル酸の金属塩、メタクリルアミド、芳香族ビニル化合物、その誘導体、アクリロニトリル、メタクリロニトリル、ビニルエステル系化合物、ハロゲン化ビニルなどがあげられる。これらは単独で用いてもよく、併用してもよい。

50 【0020】前記架橋ゴム重合体を製造する際の前記ア

ルキルアクリレートの割合が79.9%未満になると耐衝撃性または耐候変色が問題となり、99.9%をこえると多官能性単量体の割合が少なくなりすぎ、これを用いる効果が充分えられなくなる。また、多官能性単量体の割合が5%をこえるばあいには、該架橋ゴム重合体から製造されるグラフト共重合体を配合した塩化ビニル系樹脂組成物を成形したとき、耐衝撃性が低下し、好ましくない。

【0021】このようにして製造される架橋ゴム重合体の平均粒子径は、耐衝撃性を向上させるという観点からすると大きい方が好ましく、実用的には1500Å以上、好ましくは1700Å以上であることが望ましい。このような架橋ゴム重合体の平均粒子径をうる方法には種々の方法があり、とくに限定はないが、通常容易に製造される1000Å程度の平均粒子径のものを、グラフト重合させる前に通常の方法で凝集肥大化させてもよい。しかし、通常のシード重合法により平均粒子径1500Å以上の架橋ゴム重合体をうる方が、耐衝撃性への寄与の少ない小粒子の割合が少なくなるのでさらに好ましい。

【0022】本発明においては、前記架橋ゴム重合体の存在下に、メチルメタクリレート50~100%、好ましくは70~100%、アルキル基の炭素数が2~4であるアルキルメタクリレート0~50%、好ましくは0~30%およびこれらと共重合可能なその他の単量体0~30%、好ましくは0~20%からなる単量体成分の全部又は一部が重合せしめられる。

【0023】又架橋ゴム重合体の存在下に重合せしめられる前記単量体成分が全体の一部である場合は、残部は別途重合されてグラフト重合体(b)と混合されてグラフト重合体(d)となる。

【0024】単量体成分を架橋ゴム重合体の存在下に重合する分と、別途重合する分にわけると、両者の組成は同じであってもよいが異なってもよい。又架橋ゴム重合体の存在下に重合する単量体成分の部分も、別途重合する単量体成分の部分も、いずれも、好ましくはメチルメタクリレート50~100%（更に好ましくは70~100%）、アルキル基の炭素数が2~4であるアルキルメタクリレート0~50%（更に好ましくは0~30%）、およびこれらと共重合可能なその他の単量体0~30%（更に好ましくは0~20%）からなる。

【0025】又別途重合する単量体成分の部分は全単量体成分中の80重量%以下が好ましい。

【0026】前記単量体成分は、耐衝撃性、2次加工性の改良度を高めるために使用される成分であり、塩化ビニル系樹脂と相溶する成分であることが重要である。塩化ビニル系樹脂と相溶する成分として代表的なものとして、メチルメタクリレートがよく知られており、本発明においてもメチルメタクリレートを用いることが必須である。

【0027】一方、前記アルキル基の炭素数が2~4であるアルキルメタクリレートはメチルメタクリレートに

よるすぐれた相溶性を低下することなくグラフト共重合体の分散性を向上するために用いられる成分であり、その具体例としては、エチルメタクリレート、ブチルメタクリレート、プロピルメタクリレートなどが例示される。

【0028】また、前記単量体成分として使用されるメチルメタクリレートなどと共重合可能なその他の単量体成分は、その具体例として、とくにメチルアクリレート、エチルアクリレート、ブチルアクリレートなどのアルキルアクリレート、スチレン、アクリロニトリルから選ばれた単量体成分がメチルメタクリレートによる優れた相溶性を損わせることなく、耐衝撃性や2次加工性を発現させる効果が高いという点から好ましい。

【0029】前記単量体成分中に占めるメチルメタクリレートの量が50%未満になると、2次加工性の低下が見られ、好ましくない。

【0030】本発明によるグラフト共重合体(d)は、架橋ゴム重合体40~75部、好ましくは45~65部に対して単量体成分60~25部、好ましくは55~35部を合計量が100部になるように用いて重合させてえられる。該架橋ゴム重合体の量が40部未満になると、塩化ビニル系樹脂組成物を調製して成形品を製造したばあいに耐衝撃性改良効果の劣るものとなり、実用的でなくなり、一方、75部をこえると2次加工性の改善効果が充分でなくなる。

【0031】グラフト重合に際しては、単量体成分全量を一度に加えて重合させてもよく、全量または一部を連続的にまたは間歇的に加えて重合させてもよい。重合度を高めるには、単量体成分の全量あるいは一部を少量の触媒の存在下に一度に加えて重合を進めるのが好ましい。また、単量体成分はすべてを混合して用いてもよく、2段またはそれ以上の多段で重合させてもよい。

【0032】このようにしてえられるグラフト共重合体ラテックスは、噴霧乾燥、あるいは塩析または酸析を行ない、加熱処理後、濾過、洗浄、乾燥せしめられる。

【0033】凝固時に通常加えられる老化防止剤あるいは紫外線吸収剤などを加えてもよい。

【0034】また、架橋ゴム重合体のラテックスの存在下に、単量体成分の一部を加えて重合させてえられたラテックスと、架橋ゴム重合体のない系で残りの単量体成分を乳化重合させてえられたラテックスとをラテックスの状態に混合し、凝固、脱水、乾燥させ、本発明によるグラフト共重合体(d)をえてもよい。

【0035】さらに、架橋ゴム重合体のラテックスの存在下に単量体成分の一部を加えて重合させたのち、凝固、脱水、乾燥させてえられたパウダーと、架橋ゴム重合体のない系で残りの単量体成分を重合させてえられたパウダーとをパウダー状態で混合して本発明によるグラフト共重合体(d)をえてもよい。

【0036】本発明においては、グラフト共重合体(d)中の単量体成分を重合させた重合体の重合度を高めるこ

とが、すなわちグラフト共重合体(d) からメチルエチルケトンにより抽出される成分の0.2g/100ccアセトン溶液の30℃での粘度から求められた η_{sp}/C が、式(1)：

$$\eta_{sp}/C > (A) / 80 \quad (1)$$

(式中、Cは100ccのアセトンに溶解させた成分のg数、すなわち0.2、(A)はえられるグラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体部数、すなわち、グラフト共重合体(d)100部中にしめる架橋ゴム重合体の部数を表わす)を満たすものとするが、2次加工性を良好に保ち、かつ架橋ゴム重合体の使用割合を多くすることによる耐衝撃性の向上をはかる上で必須である。 η_{sp}/C が式(1)を満たさないばあい、単量体成分を重合させた重合体の重合度が低くなり、十分な2次加工性がえられず、また、高温時の伸びが低下する。

【0037】前記メチルエチルケトン抽出成分の η_{sp}/C は式(1)を満たす範囲であればよく、異なった分子量分布をもった成分の混合物であってもよい。

【0038】また、本発明においては、えられるグラフト共重合体(d)をメチルエチルケトンで抽出したばあいにメチルエチルケトン抽出により不溶分として分離される成分のグラフト共重合体(d)中の比率(%)とグラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体の比率(%)とが式(2)：

$$\{ (\text{グラフト共重合体(d)中の不溶分の比率}(\%)) / (\text{グラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体の比率}(\%)) - 1 \} > 0.1 \quad (2)$$

を満たすことが必要であり、このばあいには、高温時伸びおよび強度ともに良好となる。

【0039】前記式(2)におけるグラフト共重合体(d)中の不溶分の比率(%)とは、グラフト共重合体(d)100部をメチルエチルケトンに溶解したのち、遠心分離してえられた沈殿分の部数のことであり、グラフト共重合体(d)中の架橋ゴム重合体の比率(%)とは、グラフト共重合体(d)100部を重合するときに用いた架橋ゴム重合体の部数のことである。

【0040】前記のごとき本発明によるグラフト共重合体(d)は、アルキルアクリレート为主体とする架橋ゴム重合体と場合によりアルキルメタクリレートを主成分として含む特定の単量体成分とから形成されており、単量体成分を重合させた重合体の重合度(メチルエチルケトン抽出分の重合度)およびそのメチルエチルケトン抽出不溶分の割合が式(1)および式(2)の関係を満たすよう *

蒸留水	250	部
ロジン酸カリ	0.5	"
ステアリン酸カリ	0.5	"
ホルムアルデヒドスルホキシル酸ナトリウム(SFS)	0.1	"
Na ₃ PO ₄ · 12H ₂ O	0.45	"
EDTA · 2Na	0.008	"
硫酸第1鉄 · 7水塩	0.002	"

そののち、チッ素気流中で攪拌しながら40℃に加熱し、※50※ブチルアクリレート 100部、アリルメタクリレート 2.0

*に調製されたものである。また、前記架橋ゴム重合体のグラフト共重合体(d)中にしめる割合を40~75%としたものである。その結果、塩化ビニル系樹脂組成物にして成形品にしたばあいの耐衝撃性を高く保つと同時に、成形品の2次加工性をも大幅に改善することができ、高温時伸びおよび強度ともに良好となる。

【0041】えられたグラフト共重合体(d)は、塩化ビニル系樹脂と混合することにより、成形品にしたばあいに耐候性、耐衝撃性を高く保つと同時に成形品の2次加工性をも大幅に改善することができる塩化ビニル系樹脂組成物がえられる。

【0042】なお、本明細書にいう塩化ビニル系樹脂とは、塩化ビニル単独重合体をはじめ、塩化ビニルを70%以上含む共重合体である。

【0043】30%まで塩化ビニルと共重合する単量体としては、ビニルアセテート、ビニルプロピオネート、ビニルブチレート、ビニルベンゾエート、アクリル酸、メタクリル酸、メチルアクリレート、エチルアクリレート、メチルメタクリレート、エチルメタクリレート、メタクリルアミドその他の共重合可能なモノオレフィン系単量体があげられる。これらは単独でまたは2種以上を使用することが出来る。

【0044】前記塩化ビニル系樹脂に対するグラフト共重合体(d)の混合量は用途により異なるが、一般的には塩化ビニル系樹脂100部に対してグラフト共重合体(d)10~30部である。該量が10部未満では十分な強度、2次成形性がえられず、また30部をこえると成形物の抗張力の低下が問題になる。

【0045】本発明の塩化ビニル系樹脂組成物は、前記塩化ビニル系樹脂、グラフト共重合体(d)以外に、安定剤、滑剤、可塑剤、着色剤、充填剤、艶消し剤、抗酸化剤、紫外線吸収剤、発泡剤等を加え成形に使用することができる。

【0046】つぎに実施例に基づき本発明の方法を説明する。

【0047】実施例1

(A) 架橋ゴム重合体の製造に使用するシードの製造
温度計、攪拌機、還流冷却器、チッ素流入口装置、単量体添加装置を有するガラス反応器につぎのものを仕込んだ。

【0048】

部およびクメンハイドロパーオキサイド 0.1部からなる単量体混合溶液の5%を仕込んだ。ついで残り95%の単量体混合溶液を4時間を要して滴下した。添加終了後1.5時間後重合を行なって重合を完結させた。

【0049】えられた重合体の収率は97%であり、えら *

蒸留水	
(A) でえられたラテックス (固形分として)	
SFS	
EDTA・2Na	
硫酸第1鉄・7水塩	

前記組成の混合物をガラス反応器に仕込んで40℃に加熱したのち、ブチルアクリレート90部、アリルメタクリレート2部およびクメンハイドロパーオキサイド0.1部からなる単量体混合物を4時間にわたり連続的に添加した。また、単量体混合物の添加と同時に、1部のステアリン酸カリウムを5%水溶液にしたものを4時間にわたり連続的に添加した。添加終了後0.05部のSFSを追加し、さらに5時間重合を行ない、架橋ゴム重合体ラテッ ※

(B) でえられた架橋ゴム重合体ラテックス (固形分として)	55	部
SFS	0.05	"
EDTA・2Na	0.01	"
硫酸第1鉄・7水塩	0.005	"

ついで下記単量体成分を3時間で連続的に添加した。 ★ ★ 【0055】

メチルメタクリレート	40	部
ブチルアクリレート	5	"
クメンハイドロパーオキサイド	0.04	"

添加終了後さらにクメンハイドロパーオキサイド0.01部を追加し、2時間撹拌を続けて重合を完結させた。転化率は、99.7%であった。

【0056】えられたグラフト共重合体ラテックスを塩析、脱水、乾燥させることにより、目的とするグラフト共重合体をえた。

【0057】えられたグラフト共重合体からメチルエチルケトンにより抽出される成分の η_{sp}/C およびグラフト比を後述の方法により求めた。結果を表1に示す。

【0058】(η_{sp}/C) グラフト共重合体を30℃のメチルエチルケトンに24時間浸漬後、遠心分離により可溶分を分離したのちメタノールにより再沈精製して乾燥させ、えられた抽出成分を0.2g/100ccアセトン溶液にして30℃で粘度を測定し、 η_{sp} を出す。Cは100ccの溶媒に溶解させた抽出成分のg数であり、このばあい0.2である。

【0059】(グラフト比) グラフト共重合体をメチル ★

塩化ビニル樹脂 ($\bar{P}=800$)

【0063】

グラフト共重合体	20	"
ブチルスズメルカプト系安定剤	3	"
ステアリン酸ブチル	1	"
脂肪酸のポリグリコールエステル50	0.5	"

* れたラテックスの平均粒子径は900Aであった。

【0050】(B) 架橋ゴム重合体の製造

(A) でえられたラテックスをシードとして用い、シード重合を行なった。

【0051】

250	部
10	"
0.1	"
0.008	"
0.002	"

※クスをえた。

【0052】前記単量体混合物の転化率は98%であり、えられたラテックスの平均粒子径は2000Aであった。

【0053】(C) グラフト共重合体の製造

ガラス反応器に下記組成になるように原料を仕込み、45℃にてチッ素気流下で水性分散液の酸素濃度が0.5ppm以下になるまで加熱撹拌した。

【0054】

55	部
0.05	"
0.01	"
0.005	"

☆エチルケトンに30℃で24時間浸漬後、遠心分離により不溶分と可溶分とを分離する。グラフト共重合体中の不溶分の比率(%)およびグラフト共重合体に含まれる架橋ゴム重合体の比率(%)から次式にしたがいグラフト比を計算する。

【0060】グラフト比=(グラフト共重合体中の不溶分の比率(%) / (グラフト共重合体中の架橋ゴム重合体の比率(%)) - 1

えられたグラフト共重合体を、下記の配合処方1にしたがって配合し、180℃にて8分間ロール混練後190℃の熱プレスで15分間圧縮成形し、0℃アイソット衝撃強度、高温時伸びを下記方法により測定した。結果を表1に示す。

40 【0061】(配合処方1)

【0062】

【外1】

100 部

20	"
3	"
1	"
0.5	"

(アイゾット衝撃強度) ASTM D 256-56 に準拠し、0℃、厚さ3mm、Vノッチ付き試料の強度 (kg・cm/cm²) を測定した。

【0064】(高温時伸び) ロールプレスによりえた厚さ3mm板を切削し、JIS 2号ダンベルを作製した。このダンベルをJIS K6745により 180℃にて引っ張り、破断時の伸び (%) を測定した。

【0065】実施例2～4

実施例1の(C)において使用した架橋ゴム重合体の部数、グラフト重合時の開始剤系(SFS、クメンハイドロパーオキサイド)の使用部数を変量することによりメチルエチルケトン可溶分の η_{sp}/C を変更した以外は実施例1と同様にしてグラフト共重合体をえた。

*

*【0066】実施例1と同様にしてグラフト共重合体の評価、成形した成形体の物性の測定を行なった。結果を表1に示す。

【0067】比較例1～5

実施例1の(C)において、使用する架橋ゴム重合体の部数、開始剤系の部数を変えてメチルエチルケトン可溶分の η_{sp}/C を変更した以外は実施例1と同様にしてグラフト共重合体をえた。

【0068】実施例1と同様にしてグラフト共重合体の評価、成形した成形体の物性の測定を行なった。結果を表1に示す。

【0069】

【表1】

表 1

実施例番号	グラフト共重合体中の架橋ゴム重合体部数(A)	η_{sp}/C	(A)/80	グラフト比	アイゾット衝撃強度(0℃) ² (kgcm/cm ²)	高温時伸び(180℃)(%)
1	55	1.0	0.69	0.70	52	460
2	50	0.7	0.63	0.70	36	470
3	50	1.5	0.63	0.72	40	520
4	75	1.2	0.94	0.18	120	480
比較例 1	75	0.7	0.94	0.18	118	220
"	50	0.3	0.63	0.71	38	200
"	90	0.5	1.13	0.06	40	130
"	90	1.5	1.13	0.05	48	150
"	30	1.5	0.38	1.20	5	590

【0070】表1の結果から 0.1をこえるグラフト比を ※ ※有し、 η_{sp}/C とグラフト共重合体中の架橋ゴム重合体部

数(A)が式(1)の関係を満たし、かつ40部以上の架橋ゴム重合体を含むグラフト共重合体は、アイゾット衝撃強度および高温時伸びともに優れていることがわかる(実施例1~4)。

【0071】一方、 η_{sp}/C が式(1)の関係を満たさないばあいには、著しく高温時伸びが低下することがわかる(比較例1~3)。

【0072】また、グラフト比が0.1以下であるばあいにも高温時伸びが低いことがわかる(比較例4)。

【0073】さらに、架橋ゴム重合体が40部未満のばあいには、アイゾット衝撃強度が著しく低下することがわかる(比較例5)。

【0074】実施例5~7

実施例1の(C)における単量体成分を表2に示すように変更した以外は実施例1と同様の操作を行ない、グラフト共重合体をえた。

【0075】実施例1と同様にしてグラフト共重合体の評価、成形した成形体の物性の測定を行なった。結果を表2に示す。

【0076】また、えられたグラフト共重合体の(A)/80は、すべて0.69であった。

【0077】なお、表2におけるMMAはメチルメタクリレート、BMAはブチルメタクリレート、BAはブチルアクリレート、ANはアクリロニトリルを示す。

【0078】比較例6~8

実施例1の(C)における単量体成分を表2に示すように変更した以外は実施例1と同様の操作を行ない、グラフト共重合体をえた。

【0079】実施例1と同様にしてグラフト共重合体の評価、成形した成形体の物性の測定を行なった。結果を表2に示す。

【0080】また、えられたグラフト共重合体の(A)/80はすべて0.69であった。

【0081】

【表2】

表 2

実施例番号	単量体成分(部)				η_{sp}/C	グラフト比	アイゾット 衝撃強度 (0℃) (kgcm/cm ²)	高温時伸び (180℃) (%)
	MMA	BMA	BA	AN				
5	30	10	5	-	1.1	0.70	55	440
6	37	-	-	8	1.0	0.70	60	480
7	25	20	-	-	1.0	0.73	50	460
比較例 6	20	20	5	-	1.2	0.74	48	280
7	25	-	20	-	1.2	0.74	50	200
8	15	20	-	10	1.0	0.71	32	240

* * 【0082】表2の結果から、単量体成分の組成が本発明における組成範囲にあるばあいには、成形体は優れた高温伸びを示すが、単量体成分中のメチルメタクリレートの割合が50%未満となったばあい(比較例6、8)およびメチルメタクリレートの割合が50%以上であっても、メチルメタクリレートと炭素数2~4のアルキルメタクリレート以外の単量体の割合が30%をこえたばあい(比較例7)には、高温時伸びの低下することがわかる。

【0083】実施例8

(D) 単量体成分のみの共重合体の製造

蒸留水 200部、ステアリン酸カリウム 2.0部、カリウムパーサルフェート 0.1部をガラス反応器に仕込み、70℃に加温したのち実施例1の(C)において用いた単量体成分と同一組成の単量体混合物100部(メチルメタクリレート88.9部、ブチルアクリレート11.1部)を5時間にわ

たり連続的に添加した。添加終了後2時間にわたり攪拌を続け、単量体成分のみからなる共重合体ラテックス(L-1)をえた。

【0084】えられたラテックスを凝固、乾燥させたのち0.2g/100ccアセトン溶液を調製して求めた η_{sp}/C は1.0であった。

【0085】(E)グラフト共重合体(d)の製造
比較例1でえられたグラフト共重合体(b)のラテックスと、(D)でえられた単量体成分のみからの共重合体ラテックス(L-1)とを、固形分換算で3:1の割合になるようにラテックス状態のまま混合し、凝固乾燥して最終のグラフト共重合体(d)をえた。

【0086】えられたグラフト共重合体(d)のメチルエチルケトン可溶分の η_{sp}/C は、0.95であった。

【0087】実施例1と同様にしてグラフト共重合体(d)の評価、成形した成形体の物性の測定を行なった。結果を表3に示す。

【0088】比較例9

(F)単量体成分のみからの共重合体の製造
実施例8の(D)の単量体成分のみの共重合において、単量体混合物にターシャリドデシルメルカプタン0.5部を添加した以外は実施例8の(D)と同様な操作を行ない、共重合体ラテックス(L-2)をえた。えられたラテックスを凝固、乾燥させたのち0.2g/100ccアセトン溶液を調製して求めた η_{sp}/C は0.2であった。

【0089】(G)グラフト共重合体の製造
実施例8の(E)において、ラテックス(L-1)のかわりにラテックス(L-2)を用いた以外は実施例8の(E)と同様の操作を行ない、最終のグラフト共重合体をえた。

【0090】えられた最終のグラフト共重合体のメチルエチルケトン可溶分の η_{sp}/C は0.3であった。実施例1と同様にしてグラフト共重合体の評価、成形した成形体の物性の測定を行なった。結果を表3に示す。

【0091】実施例9

実施例8の(E)において行なったラテックス状態で混合して凝固、乾燥させるかわりに、それぞれのラテックスを別々に凝固、乾燥させ、パウダー状態で混合し、最終のグラフト共重合体(d)をえた。

【0092】えられたグラフト共重合体(d)のメチルエチルケトン可溶分の η_{sp}/C は0.95であった。実施例1と同様にしてグラフト共重合体(d)の評価、成形した成形物の物性の測定を行なった。結果を表3に示す。

【0093】

【表3】

表 3

実施例番号	グラフト共重合体中の架橋ゴム重合体部数(A)	η_{sp}/C	(A)/80	グラフト比	アイゾット衝撃強度(0℃)(kgcm/cm ²)	高温時伸び(180℃)(%)
1	55	1.00	0.69	0.70	52	460
8	56.25	0.95	0.70	0.18	58	450
9	56.25	0.95	0.70	0.18	55	450
比較例 1	75	0.70	0.94	0.18	118	220
" 9	56.25	0.30	0.70	0.18	50	200

* 【0094】表3の結果から、単量体成分の一部を架橋ゴム重合体のない系で別途重合させた部分と架橋ゴム重合体の存在下で残りの単量体成分を重合させてえられたグラフト共重合体(b)部分とを、ラテックス状態で混合して最終のグラフト共重合体(d)を製造しても(実施例8)、またパウダー状態で混合して最終のグラフト共重合体(d)を製造しても(実施例9)、目的とする特性を有するグラフト共重合体(d)がえられることがわかる。

【0095】実施例10~11
実施例8の(D)の単量体成分のみの共重合体の製造において、単量体成分を表4に示すように変更した以外は実施例8と同様な操作を行ない、グラフト共重合体(d)を得た。

【0096】実施例1と同様にして、グラフト共重合体

17

(d) の評価、成形した成形体の物性の測定を行なった。
結果を表4に示す。

【0097】また得られた、グラフト共重合体(d) の
(A)/80はすべて0.70であり、グラフト比はすべて0.18で
あった。

【0098】

【表4】

表 4

実施例番号	グラフト共重合 体中の架橋ゴム 重合体部数 (A)	単量体成分のみの 共重合体組成 (%)				η_{sp}/C	アイゾット 衝撃強度 (0℃) (kgcm/cm ²)	高温時伸び (180℃) (%)
		MMA	BMA	BA	AN			
8	56.25	88.9	-	11.1	-	0.95	58	450
10	56.25	82.2	-	-	17.8	0.92	62	470
11	56.25	55.6	44.4	-	-	0.99	55	420

* 【0099】単量体成分を、架橋ゴム重合体の存在下に
重合する分と、別途重合する分に分ける場合、両者の組
成が異なってもよいことがわかる。

【0100】つぎに、塩化ビニル系樹脂の耐衝撃性改良
効果の屋外における持続性を評価するため、実施例1、
8、10、11で得た圧縮成形サンプルのウェザロメーター
* (東洋理化製WESUN-HC型) による人工促進曝露
試験を行ない、300 時間及び600 時間の曝露後の各サン
10 プルのアイゾット衝撃強度評価を行なった。比較のため
に、本発明に用いるグラフト共重合体にかえて、MBS
樹脂 (商品名カネエースB-22、鐘淵化学工業株式会社
製) を用いる以外は、実施例1と同様の配合を行ない、
得られた成形サンプルの評価をあわせて行なった。この
結果を表5に併せて示す。

【0101】

【表5】

表 5

グラフト共重合体	アイゾット衝撃強度 (0℃) (kgcm/cm ²)		
	曝露前	促進曝露時間	
		300時間	600時間
実施例 1	52	42	35
” 8	58	43	30
” 10	62	55	28
” 11	55	48	32
MBS樹脂	98	10	5

【0102】

* 性、耐衝撃性、2次加工性に優れた成形品を与える。

【発明の効果】本発明の塩化ビニル系樹脂組成物は耐候 *